

# 文芸学における作品への問い

—学としての意義—

緒言

作品への問いは文芸の研究における認識の可能性を拓くべく真摯になされてきたであろうか。あるいはその問い自体は自明のことに属するであろうか。反復される行為の自動化の結果としての自明性は日常の生活世界においては一面必要ではあるが、他方でそれが行為の本来の意義を忘却させるという意味で学の認識上の妨げともなる。

W・ベンヤミンが「論文」(Traktat)の方法上の性格を「迂回としての表現」(Darstellung als Umweg)として再規定したのと同様、その影響を受けたP・ソンデイも「研究」(Forschung)の本来の意義にこだわった。「論文」の再規定に関わりベンヤミンは次のように述べている。

哲学的文体の概念には、いかなる逆説も含まれていないが、それなりの要請がある。すなわち、一連の演繹に対しては中断の技術、断片の姿勢に対しては論述の持続、平板な普遍主義に対しては主題の反復、否定的な論争に対しては充実した密度の高い実証性などが求められる<sup>1)</sup>。

この認識は惰性への徹底した拒絶であり、その意味で「論文」を書くことは通行する権威の再検証となる。「研究」も同様に既存の形骸化した観念を新たな問いによって解体・賦活することに外ならない。そうした見解に導かれながら以下、文芸学における作品への問いとはどのような探究かを論述したい。

一

個別の作品を闡明する最初の問いへの接近は、多層的な体系内でのそれぞれの局面の言の特異性の析出、また言の属する時間、方向、位置の限定から始まる。漠然とした突出を言の慣習性の中に見いだす過程でそれまで問われたことのない有意な言語分節を導く問いも形成されることがある。また、文芸の技法等の形式論的な問

渡 辺 仁 史

いにしばしば見うけられるように、問われるべき自明性の解明がかえって妨げられることもある。形骸化した問いに慣習的にこだわるのは無意味であろう。自明性の前提にいかにも違和を差し挟むかがこの場合の焦点となる。

作品の個々の言は一般に言の範列から選択的に限定され、連辞的に布置されている。ただし、言の意味的な断裂として隠喩のように言の連辞性がねじれ、予想されなかった結節点が生じていることもある。さらに言がそれ自体へ遡及的に言及していることで研究主体が判断中止を迫られる場合もある。解釈の不可能性を含めてそれらはいずれも自明性を度外視した解釈の要所として注目されることになる。

固有の言の順序と位置の必然性はそれぞれ異なり、多次的観点から平面的な言の布置の意味を多層的時間の間に移行させることで表面上の断裂も含めその意味が判明する。すなわち層序の時間性を見出す累重、層序の不連続としての断層・褶曲が一見、平面的な言の断続の中に多数見出されることになる。それらは一般に書き手が一番多く意識・体験しているはずである。多層的範列性が単なる成立論の前後関係ではなくおのおのが別体系の多層性であるゆえに、価値判断は作品の最終稿からの展望に委ねられ本文の振幅の意義が探究される。そこでは一回的表現の来歴が作品の必然性を跡づけるため必要とされるのである。

一方、類例的個として歴史的ジャンルを認識するソンデイの見解に反して、細部を凝視するほど際立ってくる文芸史における回帰しえない作品の一回性・歴史的ジャンルの具体的関係性は比較の手続きがすでに織り込まれている歴史美学固有のものである。そこには矛盾のない解釈の事例を無際限に集積させてもお見通せない多次元性の混在する作品が少なからずある。

そうした見地に立った上でなおそれぞれの体系の間隙を縫うような、体系の機能性に抵触しない、世界と恣意的な記号としての言とを結合させる、作者によっては言及されない無規定箇所の意味の充填・具象化が行われる。作品は連辞性の秩序のみで成り立っているわけではなく分節の意味論的な拮抗が必然的にある。もちろ

ん言によるそれへの言及はいつも不完全ないしは未完である。不完全性を言によって補足しようとするそばから認識が保留、遅延されてゆく。しかし、多くの場合は遅延がとめどもなく続くわけではなく、思惟のどこかでおそらく身体性が関与し区切られることになる。個々の言語の体系性が大きく損なわれることは一般的には稀である。

作品というある種の環世界における読解では焦点化すべきものの選別が前もって行われ、了解不要なもの、見えなくてもよいと判断されたものはあらかじめ認識から除外される。そこで生起するのが文芸事象であり、文芸事象とは作品の提示する有効な徴表をたどりつつ構造に即した言の意味の具象化を通して言の属する体系間で接合、変容、移行を重ねてゆく諸階梯を終章に向けてたどる、回帰できない、自明性を刷新する一回的出来である。そこでは時に高揚だけでなく目眩や落胆、中断もありうる。それが文芸事象の記述をめざしつつ往還する解釈的歩測と意義を異にするのは一連の邂逅自体の鮮明さゆえである。

回顧とともに状況を視野に入れつつ予測する時間的眺望の中にある思惟は、原則として作品すべてを記憶できるわけではないという心身の不可能性を前提に、存在の総体に対し偏在的の立場から研究として問いかけを行うことができる。問いかけへの応答は必ずしも期待できるわけではないが、沈黙する作品でもなお時間の推移の中で文脈の変更に伴いその意義が解明される可能性もありうる。螺旋的・漸進的理解のためには見聞されえた、あるいは想定しうる歴史社会的な問いの場・自己の位置の考察が不可欠である。個々の歴史的要件は作品の、一般化しえない個別性の解明の契機でもある。言に関する統計的手法はそこでは理解の幅を限定することには寄与できるが、固有性自体の意味の解明には必ずしもつながらない。作品との抗争か作品の尊重かという分岐点は確かにある。それが研究主体による理解不可能性を必ずしも意味するのではないが、固有性の美的価値認識は研究主体の偏在性に依拠せざるを得ない。理解はこの場合、必ずしも作品の肯定を意味するわけではないことは言うまでもない。

## 二

作品は多層的な体系の層序であり、層序の表層は作品ごとに入り組み方が異なることは前述した。それゆえ体系が部分的には必ずしも整合的ではないこともある。

一方で慣習的な連辞性に従った場合、表現として凡庸・拙劣な場合もある。それ

らを秤量し広義の美的価値認識を行うのは研究主体である。作品研究の主体としての固有の存在者は時代とともに認識能力の可能性を増大させているように見えるが、同時に社会形成の中で絶えず均一化の危険性にもさらされている。一方で外的事情から有限性を無意識のうちに越境してしまう存在者もいる。そうした特別な感性を主体が強いられた場合、有限性の越境という苛烈さの解釈は十分な時間を要することも考慮しなければならぬ。解釈の熟成は眺望の融合という意味で研究主体の生の中で結節点等の要所の凝縮された時間性を解き放つことによつてしかもたらされない。

作品との対峙はまだしも、時代と隔絶した、あるいは屹立した、飛躍や断絶、時間性の異なりに満ちた作品に沈潜する作品内在解釈は対象が調和的であれば研究主体にとつても穏便なのであるが、現実的にはそうした作品を対象とする研究ばかりではない。そうした意味で作品内在解釈は本来、研究主体にとって危険なことに属する。作品世界にはいまだ安定した社会的共通認識が存在しないばかりか、作中世界からの出口も定かではない。それでもなお作品に内在し続け、環世界認識を有意に更新する、あるいは間隙から外部を発見することが解釈者の使命である。虚構の濃淡、すなわちいわゆる現実との距離の遠近の調節、構成要素の変更、多次的的枠構造の越境も含めて、既存の固着した認識を刷新し、具体的な存在者の認識可能性を作品において探究する学 (Wissenschaft) として文芸学はその意義を有する。

ソンデイの場合では研究対象となる作品のしばしば空疎に「詩的」と呼ばれかねない「恣意と制御不可能なもの」の「危険」を直視しつつ、文芸学の「責務」としてあえて作品世界を引き受ける。作品に沈潜しつつ未知の認識の深みからの視界を記述することが文芸学の使命であるとの確信ゆえであろう。そこには作品の時代と解釈者の時代の必然的な懸隔と連続性があるが、あまりに性急な感性の融合はそこに亀裂・深淵をもたらさずにはおかない。時代の認識がその時代の抜きんでた解釈者の認識に追いつけない場合には解釈者は深淵を覗き込んだまま戦慄とともに佇立を余儀なくされる。作品の矛盾・破綻、意味の過剰性の多くは作品としての安定性が損傷している、ないし未完だからであるが、偶然の生の越境による創作者の心身の自明性の損傷が作品に直に刻印されている場合も少なからずある。ソンデイの研究の姿勢はそうした作品に共感を寄せるところからもたらされるものでもある。自明性が失われた状況において解釈者の心身の保全・自己への帰還可能性は、記述行為という、客観的に存在し、追理解しうる社会的・言語的迂回路によつてかる

うじて保持される。一般には公衆による消費効果も含め解釈基盤の構築・継承によって内部的に断裂した精神・作品への接近も時代の推移とともに一般化し次第に可能性の基盤を形成してゆく。前述したソンデイの言う研究 (Forschung) はそうした徴表の指摘・集積のもとで認識の高みとして継承され、発展させられるはずである。

もちろん例外もないわけではなく、前述したように時代に抜き出ようとするあの種の性急さは生からの逸脱に陥りかねないことにも細心の注意を払う必要がある。研究主体自身にとって譲れない自己同一性が脅かされることは確かにある。また、そうした事態への対応としてあえて主体的解釈を留保し、完全とは言いがたい言語的論理性にのみ依拠しようとする動向も一部にはある。しかし、それは研究主体の倫理を重んじる文芸学にとって本意ではない。ソンデイは研究すること (Forschen) についてそれがかつて

問うこと、探すこと (注 Fragen und Suchen) を意味していた。しかし、問うという契機が、したがってまた認識 (注 Erkenntnis) という契機が、この言葉の内容からしだいに失われてゆき「研究すること」は単なる「探すこと」になつてしまったのである。<sup>(2)</sup>

と述べ、正答にのみ関心を向け、研究が固定化・矮小化・平均化されてしまつていくことに警鐘を鳴らしていた。換言すれば自動化・単純化・標準化は存在者の固有性を剝奪し、統計的な人一般というあり方で個々の主体の倫理と責任を集団の中に埋没させ、匿名という様態での暴力を生じさせる危険性を多分に含み持つことに懸念を示しているのである。

### 三

作品に歴史性を見出し、美的価値認識を対象化しようとする文芸史の場合、記述行為が必須であることはこれまでも言及してきた。<sup>(3)</sup> 歴史的思考をすることとそれによつて文芸史を記述することとは明らかに次元が異なる。文芸史記述では創作者の思惟を越境して作品間の関連の中での作品の意義を記述するゆえに創作者、作品との距離が大きく、創作者の意図も定かではないことが多い。作品個別の死角がそこに沈潜しようとする記述者を脅かすに至らないという側面も確かにある。創作者は言語未分節の心身の深さを残しているのに対し、作品はすでに言語分節化された

ものとしてより限定されている。文芸史はそれらを補完的に使用する。文芸事象が作者・作品・読者の関係性の中でしか出来し得ない以上、作品の自律的展開という認識はありえないからである。

時間差で変異する本文を扱う記述者の認識は不安定となり、時間性に翻弄される場合もある。作品自体もまた研究主体にとっての依拠すべき精神的支柱であるが、作品を解釈しそれを歴史社会的文脈の中でかけがえのない徴表とともに記述し続ける限り解釈者は自己の保全にとつて不可欠な固有の言語的徴表を支点とする作品世界からの自己への帰還が可能となるはずである。

記述は時に過誤もありえ、責任上それは訂正不可能かという問題も生じる。見解を撤回しても傷痕はなお残るが、漸近線的輪郭を描き続ける未成熟な記述の脆弱性とその対極にある研究主体自身の未分節が内包する可能性を併置させて考える必要がある。抹消できないものの傍らで未分節の分節化がそれを補完する可能性は多分にある。

記述者に求められているのは純白を保持しようとするかたくな固有性ではなく、可能性としての固有性の形成への自由と責任である。ただし、二つの円の位置関係のように創作者と解釈者の位置関係はその懸隔を除去しようとするほど実際のな軋が生じる。共振的に作用する同心円以外では懸隔がなくなればその解釈は陳腐なだけで意義は少ない、あるいは常識の追認となる。その意味ではいわゆる大衆性は現状の矮小化された世界観の追認による充足の傾向であるよりほかはない。

もちろん公衆性として把握し直す時それが必ずしも無意味であるというのではなく、孤立する研究とは異なり、作品の消費・流布・社会形成を通して作品への要求水準の押し上げに寄与することも多い。翻って作品が屹立するためには少なくとも公衆の社会的要求水準を長期に渡って超える必要があるはずである。ただし、研究・記述主体とは様態こそ異なるが、公衆もまた自らの論評に責任を持つ必要性を認識する限りにおいてのみその存在意義が認められることを絶えず念頭に置くべきであろう。

繰り返すが問いが問いの場から切り離しえないのは、問いの場を具体的に構成する固有の歴史社会的心身の保全の要求があるからでもある。それは研究の遂行主体が有限な存在者として公衆と同じ社会的日常性の中にも位置づけられる必要があることからくる当然の帰結である。疲労しない、あるいは睡眠のない研究主体は想定しがたい。

心身の保全という限り、そこには広義の暴力、ないしは言論弾圧、拘束の問題も当然視野に入る。倫理性は研究の自由と一体であるからである。もちろん老病死という限定も同様に視野に入る。ただ、老病死は個人にとってほとんど不可避であるのに対して、暴力は明らかに不当で不条理な人為的・排他的行為である。現代においてあまりにも深刻でほとんど抵抗しえないまでに先鋭化した暴力に対して個人が苦痛から身を守る範囲は決して大きくはなく、研究にはこれら暴力に対し可能な限り兆候の内に公的に問うことで暴力を抑止することが求められている。<sup>④</sup>

作品の中の単なる好ましいもの選択ではなく、その選択肢がいかなる差異の微視的権力の集合から生じて与えられるに至ったのか、選択肢に窺える生活世界での対立の前提となっている力動性を追究する必要がある。固有の存在者が行為としての問いによって作品に沈潜する場合、対象との距離をしばしば無視して接近しなければならぬという意味で問いは無関心、傍観の対極に位置する。傍観はしばしば不当な支配に消極的に加担し、それゆえその立場は決して中立的であるとは言えない。<sup>⑤</sup>

問いとは何か、という同語反復のような研究上の言語的問いは、歴史社会的文脈の中で固有の存在者がある関係網の中に歴史社会的に形成された先入見としての一定の方向性を持ちながら言を通して主体的に沈潜・内在化し、その位置から時間とともに変容する眺望を言語的に認識して、忘却しえない自己の記憶の側に引き取ることがめざしている。先入見は多く個人の経験的価値認識から差し向けられる。もちろん偏在的な価値認識ではあるが生きた時間はある一定の安定性と倫理的内省をすでに経ているはずである。先入見も含めそうした自己の記憶は忘却しえない記述という補完によってより強固に自己から分離しえないものとなるであろう。

結語

問いと答えという、従来一対として考えられてきた概念は、答えが作品の中に不確定ながらも存在すること、もしくは答えが問いの中に散在していることを前提としている。正答を探すというのは何らかの権威によってあらかじめ用意された選択肢から何かを選択するだけの明らかに意義の矮小化された行為に過ぎない。問いがあくまで作品の提起する事象の更なる究明であることを失念すべきではないである

う。問いと答えという単純化された図式による把握はいわば正答主義というべきものでしかなく、問いの本来の意義の忘却に陥りかねない。

作品に沈潜するためには誰のための何のための問いかという固有性をめぐる絶えざる内省が要請される。歴史美学（ソンデイの言う歴史的美学）は体系的な普遍性を時間性のもとに解体・再統合する。問われるものの多面性ゆえに一つの問いによって別な問いが隠蔽されてしまうのを意識しつつ、問いの有する未分節を分節化し非同一的に収斂させてゆくと言の時間性の作用に再度認識の明証を求めなければならない。

注

(1) W・ベンヤミン 川村二郎・三城満禧訳『ドイツ悲劇の根源』法政大学出版局 昭和50・4 Benjamin, Walter: *Ursprung des deutschen Trauerspiels* Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1955

(2) P・ソンデイ ヘルダーリン研究会訳『ヘルダーリン研究 文献学的認識についての論考を付す』法政大学出版局 平成21・1 Szondi, Peter: *Hölderlin-Studien. Mit einem Traktat über philologische Erkenntnis.* in: Peter Szondi *Schriften Band I.* Frankfurt am Main: Suhrkamp 1978 ただし、ヘルダーリン研究会によると本稿で参照したブーアカンプ版の著作集には誤植等が少なくないという。

(3) 渡辺仁史「文芸史の可能性」、『文芸史記述の方法』『文芸史の可能性——平安文芸史新攷——』新典社 平成24・8

(4) 無名の死を強いられる、あるいは固有の死を奪われる暴力を想起すると、非日常の裂け目にはしばしば日常の層序が見られる。そこには暴力に至る何らかの歴史社会的不整合があるはずである。不整合の意味する社会的矛盾による確執を察知した上で広義の暴力の高揚・陶酔に対してはそれを停滞・鈍化させ、攻撃を回避し、何が大衆を煽動するのか熟考する必要がある。高揚・陶酔以上に警戒が必要なのはベンヤミンの言う「散文的冷静さ」の方である。歴史的制約を考慮するならばやむを得ないのであるが、ベンヤミンは肯定的にこの概念を使用している。しかし、大衆性とは一線を画すそうした分析的でむしろ冷徹な情念は現代においてすでに蔓延しており、それら相互の緊張・平衡関係の中にしかもはや平静は存続しえなくなつて

いる。存在の重圧に耐えうるすみやかで自在な個の意識が求められていると同時に、陶醉ではなく問い続ける通奏低音のようなかき消されない言葉を自己の証しとして記憶し続けるところに暴力への抵抗の端緒があるのかもしれない。

- (5) 渡辺仁史「文芸史記述の文体」『文芸史の可能性——平安文芸史新攷——』新典社 平成24・8（初出「文芸史のための基礎的考察（二）——褶曲する文体の可否——」『一関工業高等学校研究紀要』第41号 平19・2）

（二〇二一年九月二十九日受理）